

新聞記事を通して 広く社会を知り、 自分で進路を選び取る

▶ 初芝橋本高校 (和歌山・私立)

取材・文／笹原風花

教員が選んだ新聞記事を 毎日1つ読み、意見を書く

9年前、進路指導部長だった梅川先生が課題に感じていたのが、生徒の知識や情報の偏りだった。

「今の時代は、知りたいことを調べるツールも情報もたくさんあり、生徒たちは日々、雑多な情報に触れています。そうしたなか、生徒は自分が興味のあることは知っているのだけど、それ以外の情報が入ってきていないと感じていました。おじいちゃん・おばあちゃんの話の聞いたり、テレビでニュースや大河ドラマを見ることもなく見たりしているうちに、自然と知識が入っていた、社会のことを学んでいた……というインプットの機会が減っているのも一因だと思います。視野が狭く知

識が限定的な状態で将来の進路を考えても、社会にはどんな課題やニーズがあるのか、自分は社会のどの部分を担いたいのかは見えてきません。そこで、社会の状況を生徒に届けたいと思い、新聞記事を1日1つ読ませるという取組を始めました」(梅川先生)

「新聞記事を毎日読もう！」と名づけたこの取組では、月曜日から金曜日まで毎日、新聞から1つの記事を抜粋し、学年・コース問わず全生徒に配付している。記事を選ぶのは、先生たち。校長や教頭を含めた全教員が順番に担当している。

「教科はもちろん興味・関心事も個性も教員により違うので、選ぶ記事もさまざまです。ジャンルも新聞社もお任せしているの、コラムやオピニオン記事もあれば、政治、科学、文芸、デジタル、スポー



左から、校長の佐本一晃先生、進路指導部長の梅川恭代先生。

ツなど実に多彩で、教員によっては独自にコメントを入れたり記事に関連する解説や設問を追加したりするケースもあります」(梅川先生)

「私自身は、デジタルやネットワーク系の分野に関心があり、自分が興味をもった記事、かつ、生徒の生活や感覚とかけ離れすぎないものを選ぶようにしてい

進路指導の課題とテーマ

和歌山県、大阪府、奈良県の県境に位置する初芝橋本高校。母体の大阪初芝学園は2008年に学校法人立命館と教学提携を締結しており、同校にも「立命館コース」が設置されている。国公立大学を目指す生徒から、プロのスポーツ選手を目指す生徒まで多様な生徒が学ぶのも特徴。スポーツ強豪校としても知られており、特に全国レベルの強さを誇るサッカー部からは、プロサッカー選手も多く輩出している。

卒業後は、いずれのコースでも大半の生徒が大学進学を希望。進路指導においては、コースごとに生徒の希望する進路に応じた指導をしているが、全生徒を対象にした取組も少なくない。なかでも特徴的なのが、新聞の記事やコラムを活用した指導だ。クラブ活動で忙しいスポーツコースの生徒も含め、全生徒が取り組んでいる。

自己分析や大学調べが甘いまま安易に進路を選択した結果、大学進学後にミスマッチで中退してしまう卒業生がいるという課題を踏まえて、昨年度からは「セルフデザイン」を軸に据えた進路指導を実践。自分で考え、決め、行動する力の育成に力を入れている。今後は進路指導にとどまらず、学校全体の柱として打ち出していく予定だ。

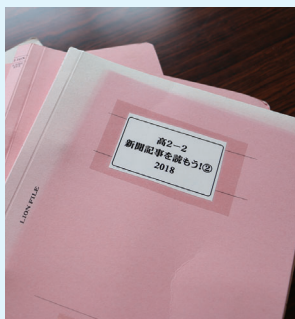
◎進路状況(2022年3月実績)

大学進学134人、短大進学2人、
専門学校進学7人、就職0人、
その他(受験準備など)6人

大学進学者の多くが近畿圏の私立大学に進学。なかでも提携する立命館大学や立命館アジア太平洋大学には推薦枠があり、例年、「立命館コース」から30人程度が進学している。

◎School Data

1991年開校／プレミアムコース、総合進学コース、立命館コース、スポーツコース/生徒数430人(男子331人・女子99人)



後から気になった記事を読み返せるよう、取り組んだプリントは学期ごとにファイリングすることを奨励している。

換えるという取組だ。毎週金曜日に、週末の課題として全生徒に配付している。「あるセミナーの事例紹介で知った取組で、私自身、国語科の教員であることもあり、これはいいなと思いい校長に相談しました。漢字力、語彙力に加え、読解力や書く力の向上も期待できますし、近年は大学入試で小論文が課されるケースが増えており、良い文章に触れて文の型を身につけることは、その対策にもなります。進路選択に不可欠な世の中のことや多角的な見方を知ることも含め、まさに「石二鳥の取組だと自負しています」(梅川先生)「新聞記事を毎日読もう!」、「すべてひらがなの新聞コラムを漢字かな交じり文に直そう!」の取組を通して社会に目を向けるようになった生徒たちに、梅川先生が望むのが、「自分の意見をもつ」ということだ。

「ただ面白いで終わるのではなく、この書き手の意見・視点には共感できるな、自分はこの人とはちよつと違う捉え方をしたな...というところから、少しずつ自分なりの意見やものの見方が形成されるのだと思います。また、記事を読んだり

コラムを書き写したりしているうちに、意見の根拠も蓄積されていきます。そうしたものが融合して、『これについてどう思うか』と尋ねられたときに、何かしらアクションができるようになってくれたらと思います」(梅川先生)

自分で考え、自分で決め、自分から行動できる力をつける

こうした取組を続けるなかで見えてきた次なる課題が、「自分からやる・自分で決める」という力を育てることだった。「新聞記事を読ませる、書かせる、進路を選ばせるなど、私たち教員が、させる」という状態で止まっていたのは、生徒に自ら考えて行動する力はずきません。生徒を見てみると、志望校を目指して勉強するぞとスイッチが入ると、新聞記事などへの取り組み方も能動的なものへと変わってきます。一方、安易に進路を選んだが故に、ミスマッチを起こして大学を辞めてしまう卒業生も見えてきました。そこで、自分で考え、自分で決め、自分から行動できる力を育てようと、昨年度から新たな取組を始めました」(梅川先生)

こうして始まったのが、「セルフデザイン」だ。月々金曜日の7、8時間目と土曜日の1、3時間目を、生徒がやりたいことを選択して取り組む時間にあてている。月々金曜日の7、8時間目には5教科の講座「進プロ」、土曜日は「スタサタ!」を開講し、生徒は講座を受講しても、自習や自主活動、クラブ活動などにあててもいい。自分で計画を立て、担任と

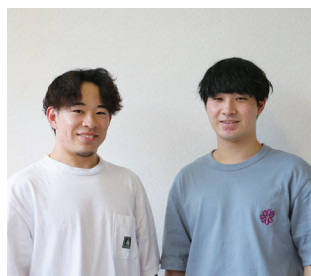
面談しながら決めていく。「スタサタ!」は、1時間目はNHK講座の視聴、2時間目は英語音声・字幕での映画鑑賞、3時間目は進路講座で、なかでも進路講座は充実のラインナップとなっている。「進路を考えるうえでヒントになるような話を聞ける講座ということで開講しています。卒業生に大学生活について語ってもらおうもあれば、大学の先生に専門分野の話をしていただく回も多く、例えば、右脳と左脳、マーケティング、生殖細胞の保存など、テーマも多岐にわたります。進路講座は生徒にも大人気で、毎回、中学生も含めて多くの生徒が受講しています。長く生徒を見てきて実感するの

が、どこでどんな出会いがあるかわからないということ。出会いや気づきのタイミングも生徒それぞれです。だからこそ、生徒が自分に刺さる何かを見つけられる機会や材料を、提供することが大事だと思っています」(梅川先生)

「セルフデザインを学校全体の軸に据え、進路指導においては、自分の適性を知ろう、社会を知ろう、そのうえで、自分で進路先を選び、自分で勉強しよう...という流れをつくっていきたくと考えています。そして生徒には、大学進学だけでなく今後の人生の節目において、自分でしっかり考えて決断し、行動に移すことができるようになってほしいと願っています」(佐本校長)

卒業生の声

新聞の取組は、最初は少し面倒でしたが、習慣化すると苦ではなくなりました。記事を読んで意見を書くうちに、読んだ内容や視点が自分のものになっていく感覚があり、コラムの書き換えも語彙力や書く力の増強にかなり役立ちました。進学する学部迷っていたのですが、3年次に読んだ本でマーケティングに興味をもち、経営学部を選びました。大学では授業の最後に簡単なレポートを書く機会があり、感じたこと考えたことをその場で表現できるのは、高校時代の積み重ねがあつたからだと思います。(真央さん)



左から、卒業生の堀田真央さん(立命館大学経営学部3年生)、望天さん(同1年生)兄弟。

ました。最初は漢字が全然わからず、調べながら書いていたのですが、続けるうちに自然と書けるようになり、読む力や考える力がついたことも実感しました。また「進プロ」で、通常授業では理系は受講できない論文講座を受講できたのもよかったです。(望天さん)